



精神的・肉体的に圧倒的な大きさの妹の誘惑に兄は…セリフSS付きCG基本20枚+差分！

今日は恥ずかしい話を聞いてもらおうと思う。  
僕と妹の話だ。

できるだけ前置きは簡潔にしたいけど、

まずは僕の家庭環境を簡単に説明しておきたい。

僕の家族は、母、姉三人、僕、そして妹の6人家族。

父はずっと前に亡くなっている。

男は僕一人である。

母親も政治家をしていて、一年を通してほとんど家にいない。

だからなにかと問題のある姉三人の代わりに、

僕が家の家事などを担当している。

一番上の姉は弁護士をしている。

最近前夫と復縁をして、家を空ける事が多くなった。

準備が整ったらたぶん近々家を出て行くと思う。

二番目の姉は小説家をしている。いつも部屋にこもりっきりで、

連日連夜徹夜が続くこともある。

三番目の姉は、護身術のインストラクターをしている。

いつも飲んだくれていて一番タチの悪い姉だ。

でも最近彼氏(?)が出来て、結構家を空ける事も多くなった。

なので、ごく最近、妹と二人きりの時間が増えた。

おっと…

妹の説明をする前に僕のこと話しておこう。

僕は高校〇年のどこにでもいるありふれた人間だ。

別に特に変わった所はない。(と思う)

ちなみにファミレスで毎日のようにバイトをしている。

前置きはこのくらいにして、僕と妹の話をしようと思う。

兄としては情けない話ではあるのだけれど…と、付け加えておく。

兄 →



「ただいまー」

「おかえりーお兄ちゃん♡  
バイトお疲れ様♡」

ててて

ぽいん♡

ジュン♡

バイトから帰ってきて、玄関のドアを開けるとそこには妹が音を聞きつけたのか待ち構えていた。



これが僕の妹のなすなだ。れっきとした○学生である。

背の高さはかなり前に僕を追い抜き(決して僕も低くは無い)

今ではたぶん180cmに迫る勢いだと思う。もちろん今も日々伸びている。

元々背の高い家系ではあるが、その中でも○学生の段階でこの高さは間違いなく一番。

兄である以前に男の僕としては複雑な気持ちだ。一歩外に出て並んで歩けば「お姉さん？」と言われる始末。

いや身長だけではない。運動神経抜群、勉強もすでに○学レベルを軽く凌駕するレベル。

頭脳明晰、気遣いも出来、兄の手伝いも率先し、時には僕のバイトまでも手伝う事がある。



僕が妹だからと最真目に見てたとしても、僕の妹が凄いのはお分かりいただけると思う。でも最近さらに困っている事がある。

その…なんというか…女性的な部分の成長も著しいのだ。はっきり言うとお胸とかおしりとか。兄である僕でさえ本当に○学生なのだろうか？と思ってしまっただ。大人の女性であつてもここまで大きい人はほとんど見かけない。これも元々ウチの家系ではそういう傾向なのだけど、この歳でと考えると群を抜いてるとしか言い様がない。別に胸に詳しい訳じゃないけど、目算で3桁に迫る勢いなんじゃないかな？と思う。

はっきり言って、目のやり場に困る。

僕もれっきとした男子なので、妹といつてもやはり

気になるものは気になるのである。

どいーん。

「お兄ちゃん今日ご飯食べたら勉強教えてくれる？」

「……ああ、いいぞ」

「えへへ♥やった♥夕食の準備私も手伝うね」

…しかも成長だけではなく二人の時間も増えたせいなのか…最近…なずなの様子がおかしい…  
いやおかしいというか、なんとというか…その…妙に色っぽい顔をしたり、

体を密着させてきたり…いや、僕の意識のし過ぎかもしれない。気のせいだと思いたい…

例えば少し前にこんな事があった…



残暑も残る蒸し暑い日…何気なくテーブルに着くと、なぜながアイスを食べていた。  
なんとというか…すごく色っぽい顔と目線を僕に送ってくる。

「お兄ちゃん今日暑いね…このアイスすっごくおいしいひ…お兄ちゃんも食べる？」

「うや…うやよ」

「そっ…ん…♡…はふ…あ…溶けてきちゃう…」



ギシッ

かなり暑いのだろう...汗をかいている...そして歳不相応の胸は尚更蒸れるらしい...グイッと襟口を引っ張って扇いでいる。その胸はズシッと重たそうだ。僕は慌てて胸から視線を外す。妹の谷間にドキドキするなんて...しかも相手はまだ○学生だ。...でも最近こういう事がよくある。たぶん○学生だからそういう意識がまだ低いのだ。...と思いたい。でも敢えて僕に見えるような角度にしてる感じがするのは気のせいだろうか...?



ムレ

パタ

グイッ

ムレ

パタ



「ほんとアイスいららない？おいひいよ…でもいつぱい溢れてきちやう…舐めるの大変♡」

こういう事の他にも胸が当たったり、お風呂をいっしょに入ろうと誘われたり、妙に僕の体を触ってきたり…露出の高い服を僕の前だけ着てきたり…僕は日々のこういう事に対して、意識しないように、気にしないようにするのに大変だった。実の妹に変な感情を起こしてしまいそうになる。

でもついにそれが「気のせい」ではすまなくなる事件が発生した。



僕はその日その時自分の部屋にいた。今日は姉達が二人いないし、2番目の姉も部屋にカンヅメで出てこない。至って平和な日のはずだった。そういえば夕食なんだけど、自分で味見して作ったのに少し変な味がして失敗してしまったようだ。なずなは美味しいそうに食べてたんだけど…。夕食を食べた後自分の部屋で本でも読もうとした。でも読み始めようとした時ドアからノック音がした。

コシ  
コシ

「お兄ちゃんいる？今大丈夫？」

「なずなか？うん…大丈夫だよ」

そしてなずなが僕の部屋に入ってきた。

僕はそこで見た妹の意外な姿に軽く気が動転した。

「お兄ちゃん♡」

「な！な…なずな…なんだその格好はっ!？」

「なにつて体操着だよ?」

「いやいや!なずなの○学校普通の短パンだろっ!？」

カチヤ

バタン

「梢姉ちゃんにお下がりが貰ったの!」

体操着&ブルマ姿の妹が僕の部屋に入ってきた。…しかもなぜさりげなく鍵を閉める!?!  
というか…あんのクソ姉!なんでそんなモンを妹にあげてるんだ!?

アムム



「……で、なんでそのブルマを履いて僕の部屋に……？」

「せっかく貰ったしお兄ちゃんに見てもらおうと思って……ブルマ嫌い？」

いや好きですけど！というか健全な男子で嫌い奴はいるのだろうか？

いやいや……そういう問題じゃない……それにしても……

○学生のサイズでは上も下もキツキツなんだろう……胸が窮屈そうだし、ブルマもパツパツに見える。それがさらにエロさを加速させてる気がする。

マジマジと見るのは危険だ……でも目が離れない……

なんか変だ……体が……顔が熱い……妹の体操着ブルマ姿を見ただけに……

僕興奮してる……マ……マズい……このままだと……



「な…なずな？特に用事がないなら…僕は本読もうと思ってる…」

「お兄ちゃんこの格好どうかな？」

「どうって…ん…か…かわいいよ？」

「なんで目を背けるの？もつと見て」



妹がジツと僕を見つめてくる。いつもならさうさう事も耐えられる…のに…

今日は僕なんだか変だ…ヤバい…下半身に血が集まっていく…

「あれれ？お兄ちゃんなんで前かがみなの？」

「いーいやー！これはなんでもない！なんでもないから！」

「もしかして…お兄ちゃん私のブルマ体操着姿で興奮しちゃった？」

「なななななな…なんのことかな(汗)」



「隠さなくていいよ。おちんちん…オッキしちゃったんでしょ？」

「バレてるっ！汗のよつな汗が全身から噴き出す。」



「なすなで興奮してくれたんでしょ？嬉しいな」

「いや！これは違うんだなすな！なんか今日は体の調子が変わで…」

「お兄ちゃん…なすなにを見せてみて」



そう言っと、目にも留まらぬ速さで僕のスウェットパンツとトランクスを脱がしてしまっ。

抵抗する暇も無い。あっという間に勃起したモノが外に放り出される。

ああ…妹に見られた…妹で興奮して勃起したモノを…

「お兄ちゃん…なずなに任せて♡」

そう言っとなずなは僕の玉を口の中にすっぽり吸い込んで口の中で転がしはじめた。同時に指先で尿道を的確に刺激してくる。玉と尿道…普通ならどっちも直接射精感に繋がらない…はずなのに僕はもう我慢できなくなっていた。やっぱりおかしい…

僕はどうしてしまったんだろう。頭がボーっとして考えがまとまらない。感度が異常に敏感だ。なずなに上目遣いで見られているだけでも頭がどうにかなくなってしまいそうだ。もう蛇に睨まれた蛙のようだった。僕は文字通りこの大きな妹に今飲み込まれようとしている…





「お兄ちゃん…もう出そう…タマタマがキュって上がってきてる…」

なすなの言っとうり僕はもう限界だった。射精寸前だ。妹に玉を口の中で転がされて、尿道を責められて僕はイキそうになってる。駄目だと心ではわかっていても出したくてたまらない。出さないと頭がおかしくなりそうだった。

「な…なすな…だ…駄目だ…それ以上は…はあはあ…あ…あ…」

「お兄ちゃんいっぱひ出ひて♡」

ずっと耐えてきた…妹に対してずっと守ってきた…僕の心の牙城はその妹によって…いともたやすく壊された。





僕は射精した。妹の指で。妹の玉舐めで。全身が痺れるような感覚が襲う。体が思わず仰け反ってしまっ。体のいたる細部で小刻みに弛緩が起る。こんな射精感初めてだ。自分の何かがはじけた気がした。オナニーなんて話にならない。たぶん人生で一番オーガズムに達し、頭が真っ白になった。

ピュッ

ドッピョッ

ハクハク

「お兄ちゃんおちんちんまだ全然収まらないみたいだね」  
僕自身驚いた。全然萎えない。  
いやむしろさらに性感が高まっていくみたいだ。

「お兄ちゃん…なずなのおっぱい見て…お兄ちゃんの為に急いで成長したんだから♡」

むち、

うわあ…ホントに大きい…改めて○学生とは思えない。  
なすなどお風呂に入らなくなつて、まだ2年ぐらいはなす…  
その2年間でどんだけ成長してるんだ…

ずっしりと量感のある胸がスポーツブラの中にギュウギュウに押し込まれている。  
これでも抑えこんでいるのか。我が妹ながら未恐ろしい…

ぽいーん♡

「次はおっぱいでしてあげる…まずなのおっぱいはお兄ちゃんだけのものだよ」  
もう僕は頭がぐちゃぐちゃで目の前の状況を拒むことなどまったく出来ない。  
もう自分の体が次の射精を求めて自制心を完全に崩壊させている。

それが実の妹であるにもかかわらず…だ。

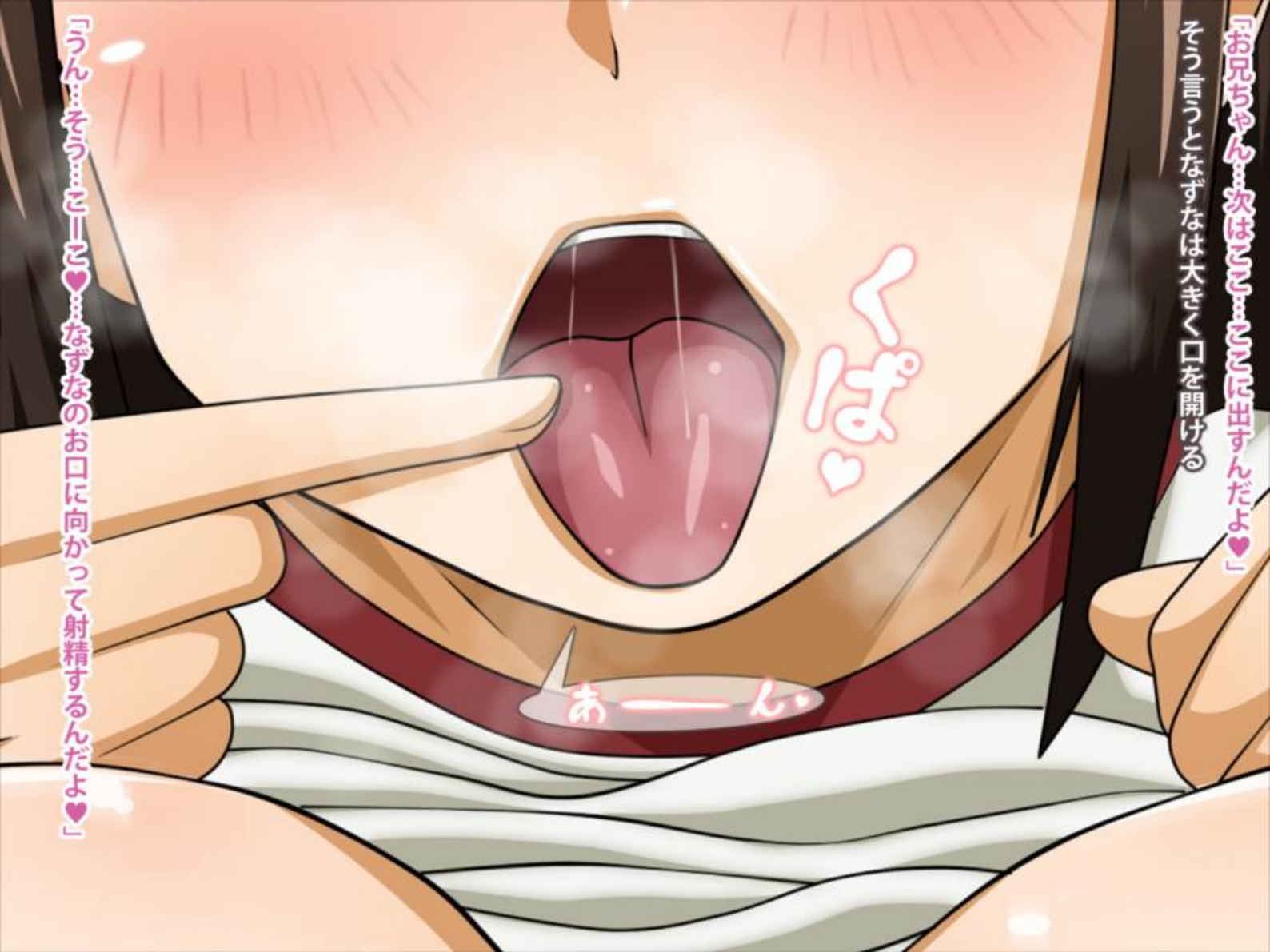


「お兄ちゃん…次はここ…ここに出すんだよ♡」  
そつ言つとなずなは大きく口を開ける

くば♡

あーん♡

「うん…そつ…ここ♡…なずなのお口に向かって射精するんだよ♡」



「なずなのおっぱいでいっぱいシロシロして…お口めがけて射精して」  
なずなの大きな胸の中にすっぽりと包み込まれるペニス。  
早く射精させると急かすように意思とは別にビクビクと震える。  
なずなが親鳥から餌を貰うかのような様子で僕を見つめる。  
嫌が上にも気持ちが高ぶる。

「ほら…いいよお兄ちゃん…好きなように腰を動かして…」  
なずなが射精するまでおっぱいで包んであげてあげるから♡」



ぎゅむ♡

なすなの言葉に導かれるように必死に腰を振る…  
うっすら汗ばんてしっとりしてらる胸が  
吸い付くようにフィットする。

「あん♥お兄ちゃん激し…なすなのおっぱい気持ちいい〜」  
気持ちさらさらの気持ちさらさらの気持ちさらさらの…



ぱむ。

ぱむ。

ぱむ。

ぱむ。

いけない事だつて脳裏ではわかつてるはずなんだけど…  
もう腰は止まらない…ああ…イキそうだ…妹の胸で射精してしまえそうさ。

「お兄ちゃんいいよ♥なすなのおっぱいでイッて！  
私の顔に口に…アツアツの精子たくさんぶっかけてえ♥」



「あんっ♡」

ドピッ

ピク

ピク

なすなの顔、口に向かって射精を開始する。  
自分でも驚くほど射精は止まらない。  
妹の顔があっという間に真っ白に染まってゆく。  
口内には精子が溜まっていく。



「なずな…ごめん…顔汚して…」

○学生の妹の胸でハイズリして…あまつさえ大量の精子で汚してしまった。  
「ううん♥お兄ひゃんの精子がいっぱいうれしい♥」  
そう言うと口内に出された分の精子を喉を鳴らして飲み込んでいく  
その様子は本当に嫌々という感じは無く、本当に美味しそうに飲み込む。  
絶対おいしくなんかはないはずなのに…

はあ



はあ



ぐわ

ぐわ

はあ

射精の余韻で気づかなかったけど…

一瞬強張りの解けたペニスが

なずなのその様子に刺激されるように

また勃起状態を取り戻していく

「お兄ちゃん…もう…私我慢出来ない…」

ピクッ

ピクッ

なずなは服を脱いで僕をベッドに押し倒す…あ…そうか…そういうことか…  
頭が暴走気味だけど、妹に既に2回も射精させられておいてなんだけど…  
一線を超えるのはさすがにマズいのではないか…  
しかも相手はましてや実妹で○学生…タブーのダブルパンチだ…

「なずな…ちよつとま…」

「待たない…お兄ちゃんの童貞…私に頂戴…私の初めてもあげるから」

そうか…あまりにも手馴れてるからもしかして、経験済みなのかと思ったけど、  
なずなも初めてなのか…そりゃそうか○学生なんだから…

ギシッ

「まずな…お前後悔しないか？お前の大事な初めてをお兄ちゃんなんかで済ませるなんて…」  
「私の初めては絶対お兄ちゃんにあげるって決めてたもん…後悔なんてするわけない！」

ドキ

ドキ

ドキ

いろんな感情や思い出が走馬灯のように僕の頭を駆け抜ける  
妹の表情は真剣で、意志は堅いようだ。  
僕はこないだじらしい妹を拒むことができるはずもなかった。

「……入れるね」



「…ん♡」

ああ…妹の中に僕の初めてが飲み込まれていく…うわっ…すばらしい…  
女の子の膣内ってこんな熱くてヌルヌルで気持ちいいのか…

ドキ♡

「入っちゃった…♡お兄ちゃんの初めてもらっちゃったよ♡」

ついに妹と二線を超えてしまった…頭が若干朦朧とするけど…  
なんでこんな事になってるんだっけ？あれ？うまく思い出せない…

「じゃあ…動くね…」

ドキ♡

ドキ♡

いっしょ♡

↑



「あん♡はっ♡はっ♡あ♡あ♡」

うわわ！想像以上だ！気持ちいい！入れただけであんだけ気持ちいいんだから動きが加われば当たり前か…いやそれにしても気持ちいい…  
というかならずな…初めてで痛くないのか？

はっ♡

あ♡

はっ♡

あん♡

「お兄ちゃん…♡は♡あ♡ん♡な…ずなの…中…気持ちいい？♡」

○学生の妹が僕の上で腰を小刻みに動かして、僕を射精に導こうとしている。  
完全に主導権は妹が握っている。僕は下で快楽に身を委ねているだけにすぎない。  
というかならずな…なんなんだそのエロさは！？ホントにお前○学生だよな？

パッ

パッ

パッ

パッ



射精感がこみ上げてきて、ここで大きな問題に気づいた(そもそも問題だけどもこのまま膣内で生で出すのはヤバい。非常にマズい。

「なすな！お兄ちゃんもう出そうなんだ！退いてくれ！」

妹の膣内で生で出すなんて、鬼畜な真似できない！



「ダメ♥お兄ちゃんの初めてはなすなの膣内でイカなきやダメ♥」

そう言いながら退こうとする僕の体を押さえつける。なすなは姉さんから格闘技も習っていて力も尋常じゃない。もうダメだ…もう…イク…イッテしまっ…妹の膣内で…

「お兄ちゃんなすなの膣内でいっぱい射精してっ♥」

「ああん♡」

実妹への膣内射精が開始される。  
射精の瞬間なずなは腰を深く落としさらに性器同士を密着させる。  
もう止める事などできない…次々と僕の精子が妹の中へ注がれてゆく。

ピュルルッ

ピュ





なずなが射精の余韻を楽しむかのようにプルプルと小刻みに震える。  
僕は僕でありつたけの精子を妹の膈内に打ち込み続け、射精の快感が脳内を駆け巡る。  
ああ…でも妹の膈内に中出ししてしまった…なんてことをしてしまったんだ僕は…

「お兄ちゃんの精子…いっぱいなずなの中に入ってる…♡」

「出された瞬間…体がしびれた感じでフワってなったの…すっごく気持ちよくなって

……これがイクってことなのかな？お兄ちゃんの射精でなずなイッチャったみたい♡」

女性経験が無かった僕にはわからないけど、たしかになずなはイッチているようだった。  
初めてのセックスでイクってどんだけエッチな体してるんだ妹よ…



「お兄ちゃんごめんね…無理やりこんな事して…嫌だった？」

「いや…そんな事ないよ…なずなの中…気持ち…よかった」



「ホント？嬉しい♡お兄ちゃん好き♡お兄ちゃん大好きだよ♡」

なずなは何度もその言葉を繰り返した。

僕はこの日を堺に、妹と兄妹としての二線を超えた関係性を持つこととなった。

いや…僕は「妹に完全に支配されしまった」…と言った方が正しいのかもしれない。

いつも通り風呂に入っていると、なずなが：

「背中洗ってあげる♥」

と、半ば強引に風呂に入ってきた。  
でもやっぱり普通に背中を流す気は無いらしい…

「お兄ちゃんおちんちんも洗ってあげる♥」

恥ずかしい話ではあるが、妹の裸を見た僕は勃起していた。

この前の事がフワッシユバツクした所為もあるけど、  
それ以上に元々相当な破壊力を持っているのだ妹の全裸は…  
それを直視してしまった…メデューサーか？お前は…いやサキユバスか？  
○学生の妹の裸で勃起する兄…僕ってこんな変態だったっけ？  
「お兄ちゃんの大きくなってるよ…なずなりに任せて♥」



ボディソープをローション代わりに僕のペニスをゆっくりと扱きはじめる。

「ほら」じめるじめるして気持ちいいでしょっ」

たしかにママこの気持ちよさを腰が退けずだったなる。



「お兄ちゃん…もうちょっとおしり前に出してみて…」

ん…なにぞだらっ…疑問も持たずに腰の位置を前に突き出す。

「!?」

妹の指が僕のおしりの中に侵入してくる。

「うっ…な…なすな…なにを…」

思わず玉がヒュッと上がる。なすなは構わず続ける。



「お兄ちゃん…大丈夫だからなすなに任せて♡」

いや全然大丈夫じゃない！僕妹におしりの中に指入れられている。というかそれ以前になんか恥ずかしい！恥ずかしいんですけどなすなさん!?



「お兄ちゃん知ってた？男の人ってココに前立腺っていう性感帯があるんだよ」

妹の指が僕のおしりの中を探るように蹂躞する。

完全に未体験の感覚だ…

初めてセックスした時よりある意味で衝撃だ…

おしりから背中、頭の先いまで電流が走るような感覚



「あは♡わかったココだね♡ココが気持ちいいんだね？」

そう言っている二点を重点的に責めるなずな。

なずなは僕の感じる部分を発見したようだ。

たしかにそこはヤバイ…おしりをほじられてるだけで

イッてしまっそうだ。

「お兄ちゃんおしり弄られるの気持ちいい？」

確かに最初は戸惑ったけど、なずなが巧すぎるのか  
すごく気持ちよくなってきた。  
というかなんでこんな事できるんだ？(汗)

「な...なずな」



「お兄ちゃんいいよ♥なずなのおしりホジホジで射精して♥」

そう言ってる、「急に手の動きを加速させる。ああああああ  
これはイクーイクって！」



「イ…イクっ！」

クワッ  
クワッ  
クワッ

ブツ

きん



「あは♥お兄ちゃんいっぱい出たね♥」

そう言いながら顔や胸にかかった精子を舐めとっては美味しそうに嚙下していく。僕はあまりの快感に声も出ない。腰から下が弛緩する。



そしてほほ放心気味の僕になすなは耳打ちする。

「続きは後でね♥部屋でまっけて…♥」

予告通りなずなが部屋に来て(またブルマ体操着で)

「ほらお兄ちゃん私のおっぱいちゅーちゅーして♡」

そっ言ってなずなが胸を差し出す。

「お兄ちゃんももっと甘えていいと思うの…お母さんの愛情とか

殆ど無くて育ったでしょ？なずなにはもっと甘えて♡」

確かにいいかげんな姉達の代わりに我が家の母親の役は

ずっと僕だったからな…人に甘えるという経験が

ほとんどないかもしれない…でも…

○学生の妹に甘えるってのもどうだろう？

…ん…若干アウトな気がする。



そうは思ったものとりあえずなすなの指示通り胸を舐めてみる。  
○学生にしては大きく育ちすぎた胸を舌で舐めてみる。  
舌で軽く胸を持ち上げるように下から舐める。  
スツシリと重い…舌ではなすなの大きな胸は持ち上げられない。

「お兄ちゃん目…閉じて…赤ちゃんの気分になってリラックスして…」



「そのままで…頭の中空っぽにして…力を抜いて」

暗示をかけられているようだ…いや実際暗示なのかもしれない…  
なんだか僕も自分が赤ちゃんみたいないな気分になってきた…

その声に導かれるようになすな胸を吸ってみる  
大きく口の中で乳首を転がしたり吸ったりする。

「あん…エッチな赤ちゃん♡ママ感じちゃうよお…♡」



「いっしょにちゅよ…っつかりママのおっぱいちゅーちゅーちゅーしてね♡」

○学生の妹の暴力的な程の母性力が僕を包み込む。

いつの間にか一人称が「ママ」に変わっている事にも気づかない。

この時、それほどまでに僕はトリップしてはたらしい。

「このままにカヘニスがゆるゆると扱かれはじめる。」

「はい……おちんちん気持ちいいねえ……  
ママがしっかり……シコ……シコ……  
してあげますからねえ♥  
ほら……いち……に……いち……に……」

その言葉と共に射精感が段々こみ上げてくる。

「ママのおっぱいおいしいでちゅねー♥  
好きなだけちゅばちゅばしててください♥」





「そろそろおちんちんからびゅっびゅっしちゃうそうですか?♥いいですよ...今まで我慢いっぱいして疲れたでしょう?」

ああ...イク...イッてしまっ...

「いいですよ...ほらびゅっびゅしなさい♥  
ママが全部受け止めてあげますからね♥」

びゅ

びゅ

ちゅ

ちゅ

シク

シク

「はい♡ぴゅっぴゅっ♡いっぱい出ますよ♡  
全部出しちゃいましょうねえ♡」

そのまま恥も外間もなく射精してしまっ僕…  
○学生の妹に赤ちゃん扱いされてイッてしまっ僕…

「あは♡お兄ちゃんホントに  
赤ちゃんみたい♡可愛い♡  
なずなのおっぱい  
美味しかった?♡」



ピュッ  
ドクドク

「次はなずなにエッチな事して♡」



「お兄ちゃんエッチしょ♡」

「なすななんで…お前そんなの持ってる…」

僕も実物は初めて見る…コンドームだ…

「だってお兄ちゃん生でしてっつて言ってもしてくれないでしょ？」

お兄ちゃんを困らせたくないし、負担もかけたくないし

だから買ってきちやっつた♡これで安心してなすなとエッチできるでしょ♡」

そっぴい問題なのかなあ…うーん…というか違和感なく店で買えたって事だよな(汗)

そっぴい悩んでる間もなく、手慣れたようにゴムを僕に装着させるなすな。

なんでもかんでもあたりまえのように出来る子だな…いや出来過ぎて若干怖い…



「ねえお兄ちゃん…ちゅーしてちゅー♡」

「ちゅ…ちゅ…」

なんとも無邪気な笑顔だ…。そっぴいえばこの前キスはしてない…

というか初キスを妹とするのか…

どんどんタプーの壁を越えて行ってる気がする。

というか…僕より背の高い妹にキスするのは

若干僕の自尊心みたいなのが傷つく気がする。

…なんて思ってたら…





「!!」

妹に唇を奪われた。あっけなく。しかも一気になすなの舌が侵入してきてあつという間に人生初のキスはおろかティーフキスを体験する。生き物のようになすなの舌が僕の口の中、そして舌を犯すようにまさぐる…

「ん♥はふ♥んー♥ん♥ん♥」  
「うぐ…ん…う…」

僕はもうされるがままである…なすなの息遣いが…視線が…そして舌が…僕を支配する…そのまま誘導されるようになすなに挿入する。なすなはそのままキスを止めようとしなない。



「なず…むっっっ」

なずなは僕の言葉を制するようにさらに唇を重ねる。  
すでに口の中で小規模なセックスが行われているも同然だった。  
なずなは歯茎のあたりや舌の裏っ側、上顎などを  
縦横無尽に舌で刺激してくる…



キスがこんなにエロいものだとは思わなかった。  
はつきりいって、キスだけで僕は脳が溶けそうな気分だった。

なすなの大きな体を持ち上げる…  
なすなの中…あったかい…  
ゴムを付けてても膣内ってこんなに感じるのか…  
昨日今日まで童貞だった僕には刺激が強すぎる…  
「んん…♡んん…♡んんん♡」



相変わらず言葉も無く僕とのキスに夢中のなすな。  
手で頭を抑えられているので逃げることはできない。  
例によって段々射精感が高まってくる。  
既に今日は2回射精してるにも関わらず…だ。

にゅる

んんん

僕も射精に向けてピストンを加速させる。  
そのたびに胸がユサユサ揺れる...というかここからだ  
胸が邪魔で下が見えない...ホントこの歳でよく実ったものだ...  
「ん♥お兄ひゃ♥お兄ひゃ♥お兄ひゃ♥お兄ひゃ♥」  
うわ言のように繰り返す

「なず...な...イク...」

「お兄ひゃん♥中に...中に出ひてえ♥」



「んんん」



ドクドク

グン

ズン

ドク

グン

キスしながら射精…

なすなの膣内が最後まで搾り取ろうとするが如く熱く飲む。

「お兄ひゃん♡…イクのおひやまるまれ…このまま…♡」

「あふ♡ん…♡ん…ん♡ん♡」

この後もしばらく熱いキスが  
続いたの言うまでもない。  
というかなかなか離してくれなかった…

肉体的にも精神的も

人生を飛び級していく妹だが、

妹はエッチなレベルさえも

飛び級していつてる気がする。



「むぐっ!?!」

なすなに後ろから抱きかかえられる体勢で  
身動きが取れないようにがっちりロックされて、  
なにかで鼻と口を塞がれた…まさか…コレって…



「ほらお兄ちゃんなすなの脱ぎたての靴下…」

「ん——!?!」

靴下!?!うぐっ…すこしじっとりしている…

なすなは新陳代謝がすごくいいからな…汗もよくかくし…

…っていやいやいや!なんだこの状況!なんで僕妹に靴下で

鼻と口塞がれてるの?息ができない…

「ほらお兄ちゃん息をするには、なすなの臭つさい匂い嗅ぐしかないんだよ♡  
あは♡臭い匂い嗅いでるのにおちんちんすごく勃起しちゃってるよ♡  
お兄ちゃん変態さんだから、こういうの大好きでじよ?♡  
私がこのまま足でシヨシヨしてあげるね♡」

ムン

ムン

キム



「臭い？臭いよね？ごめんね…なずなの靴下臭くて♡」

「1日中履いてたから足汗もいっぱいいかいちゃったし♡」

息をすると否が応にもなずなの靴下の匂いを嗅いでしまう。  
もつとも成長期にあると思われる妹の足の匂い…  
これは強烈だ…意識が遠のきそうになる…

「でもお兄ちゃんのおちんちんすっごいビクビク反応しっぱなしだよ♡  
なずなの靴下の臭い匂い無理やりかがされて、足でおちんちんシヨシヨ  
してもらって感じるなんてお兄ちゃんの変態っ！」



「ほらほら♡足でシヨシヨされるの気持ちいい?」

なずなの靴下の匂いと足で扱かれている快感がシクシクする。

五感を強く支配されている感覚…  
もう僕の脳内はまるでなずなの足でかき回されているようだ…

「んーっんーっ!」

「お兄ちゃんイキそうなの?」

なずなの靴下の匂いと足コキで出ちゃう?

いいよお兄ちゃん♡なずなの臭い足の匂いを嗅ぎながらいっぱい射精してっ♡」





「お兄ちゃんいっぱい出しちゃったね  
なずなの足そんなに良かった?♡」

妹の足の匂いに包まれながら射精…

…ああ…意識が遠のく…

「…お兄ちゃん♡……?」

…あれ?お兄ちゃん?」



直後、僕はマジで気絶した。酸欠が主な原因だろうけど…。

そのあと…すぐに気がついたんだけど…

今度は妹がマジ泣きして心配しててびっくりした。

気がついた瞬間大きな胸で抑えこまれて

さらに気絶しそうになったのは秘密だ。

○月×日：なずなが服が欲しいから付き合っつてと言うので、近くのデパートと一緒に出かけた。そして買い物も終わり、電車に乗って家に帰る途中…なずながまたなにか企んでるらしい…胸をすんごく密着させてくるんですけど…

ドキ

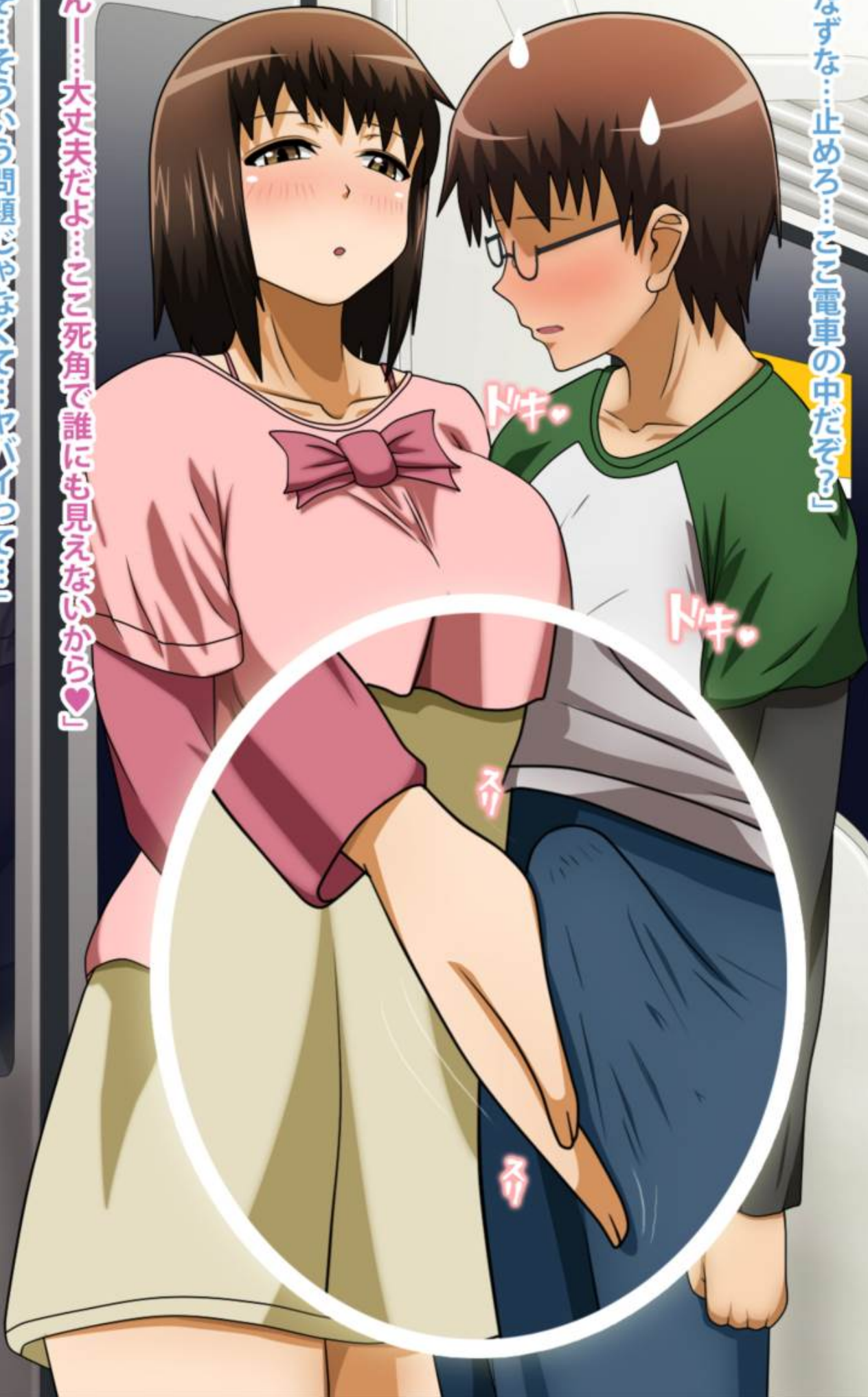
なずな



「!?」

なずなが僕の股間をまさぐりはじめた…なんちゅー妹だ!ここ電車!

「なずな…止める…ここ電車の中だぞ?」



「ん…大丈夫だよ…ここ死角で誰にも見えないから♡」

「そ…そういう問題じゃなくて…ヤバイって…」

止める気はさらさらないらしい…

「だってお兄ちゃんのココはもっとしてほしいって言ってるよ♡」  
確かに意志に反して僕は勃起を止めることが出来ない…けどさ…

「こんな所誰かに見られたら恥ずかしいね♡あ、あの人がこっちチラチラみてるかも♡」

うぐ…今他人に見られたら僕の方が完全に犯罪者にされてしまう…

○学生の妹相手に電車で勃起する兄…うーん完全アウトだ…



なずなの手がだんだんと早まっていく…

「もしかして…お兄ちゃんおちんちんイキそうなの？ここ電車の中だよお？♡」

このままだとマジでヤバイ…こんな電車内で…ましてやパンツの中で出すなんて…次の駅までは…あと数分かかるか…我慢出来そうにない…



「なずな…もう…ヤバイから…な？」

イタズラな笑みを浮かべる妹…その表情で分かった…  
本当にこのまま僕を射精させる気だ…



そしてなすが僕の耳元で囁いた…

「いいよ射精して♡」

このままパンツの中でイッて♡」

ビクッ

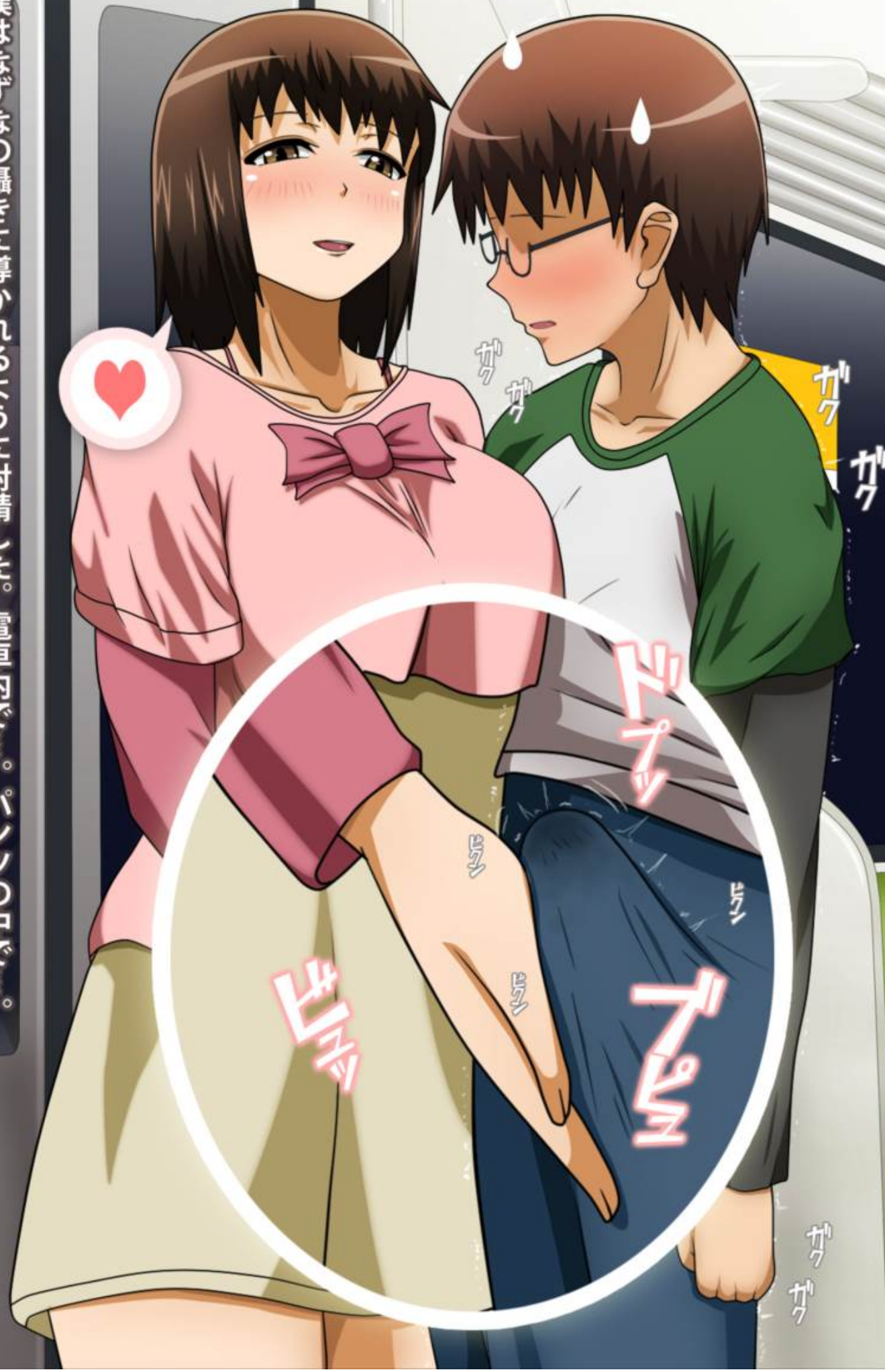
ホハハ

「~~~~~」



「……うん……」

僕はなずなの囁きに導かれるように射精した。電車内で……。パンツの中で……。



ガク  
ガク

ガク  
ガク

ガク  
ガク

ドゥッ

ズン

ズン

ズン

ズン

ズン

「お兄ちゃんイッチャったねっ♡」  
うわわ…パンツの中が気持ち悪い…

「お兄ちゃん次の駅で降りよ♡私がおちんちん綺麗にしてあげるから♡」



次の駅で降りて半ば強引に駅のトイレ(しかも女子トイレ)に連れてこられる。

「お兄ちゃんごめんねパンツ汚しちゃって…**な**ずなが代わりに綺麗にしてあげるから…♡」  
そういうとパンツを脱がし、躊躇なく精子まみれの僕のペニスをくわえ込む。

「あむっ♡……ん……ん……♡」

そしてなずなは精子を丁寧に、舐めとっていく。  
さっき出したばかりだというのに僕のペニスも  
すぐに硬さを取り戻していく。



そのままなすなは手も使わず頭を前後に振り始める…  
これが世に言うフェラチオってやつか…うっ…うっ…すっげー気持ちいい…

「んも♡…んっ…んっ…んっ…♡」

♡♡

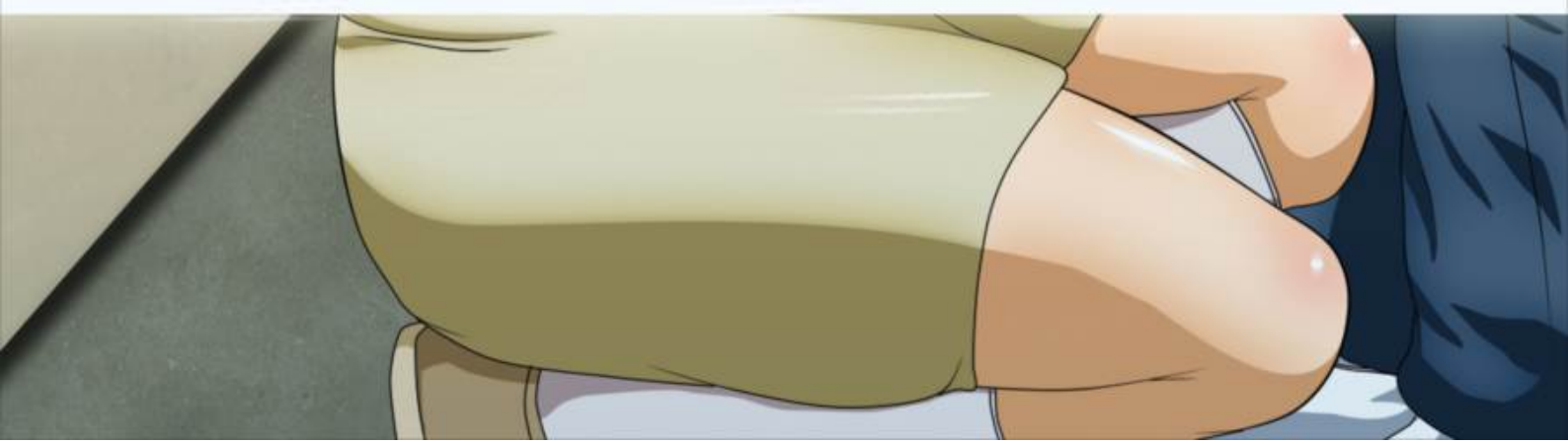
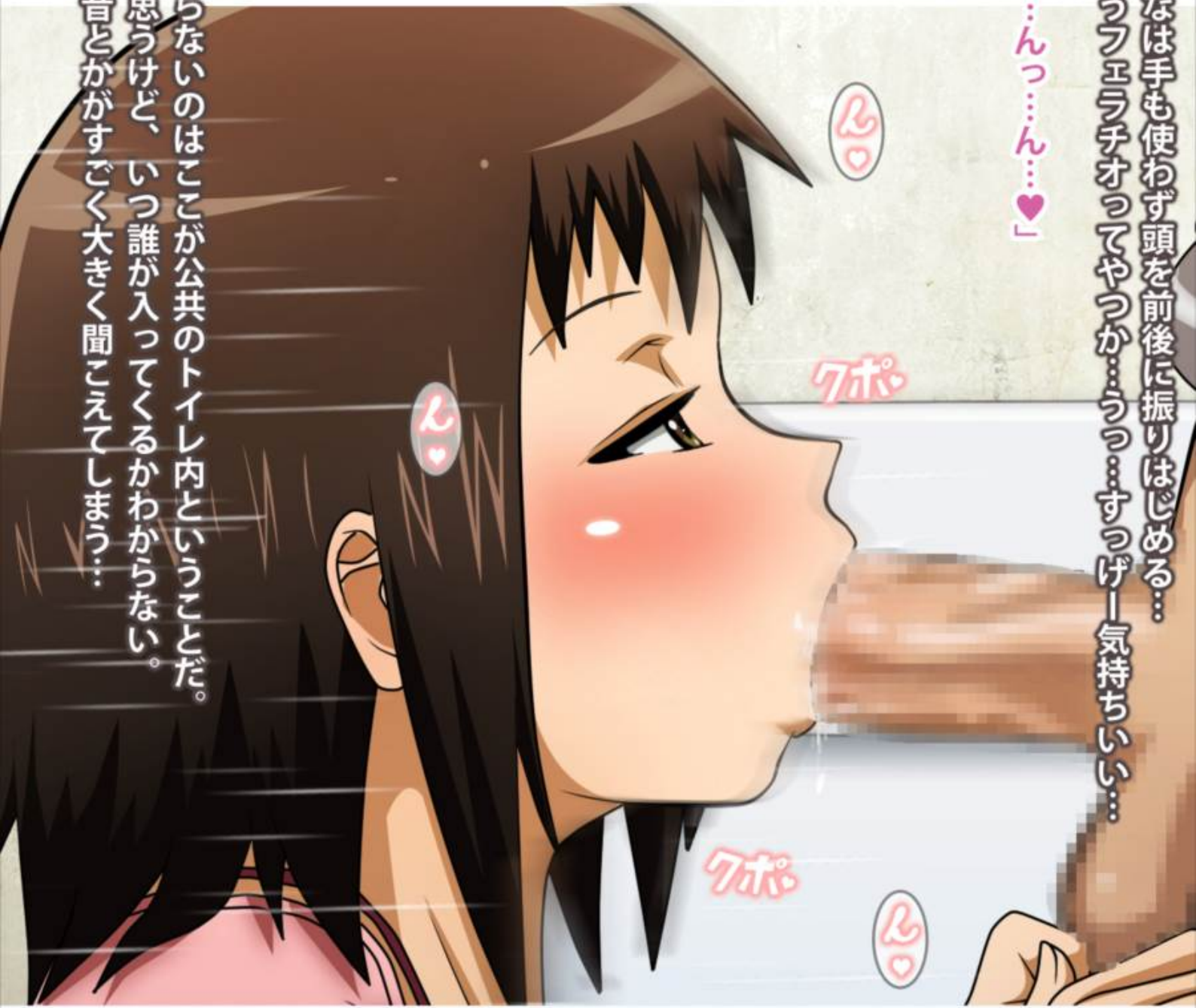
ッポ

ッポ

♡♡



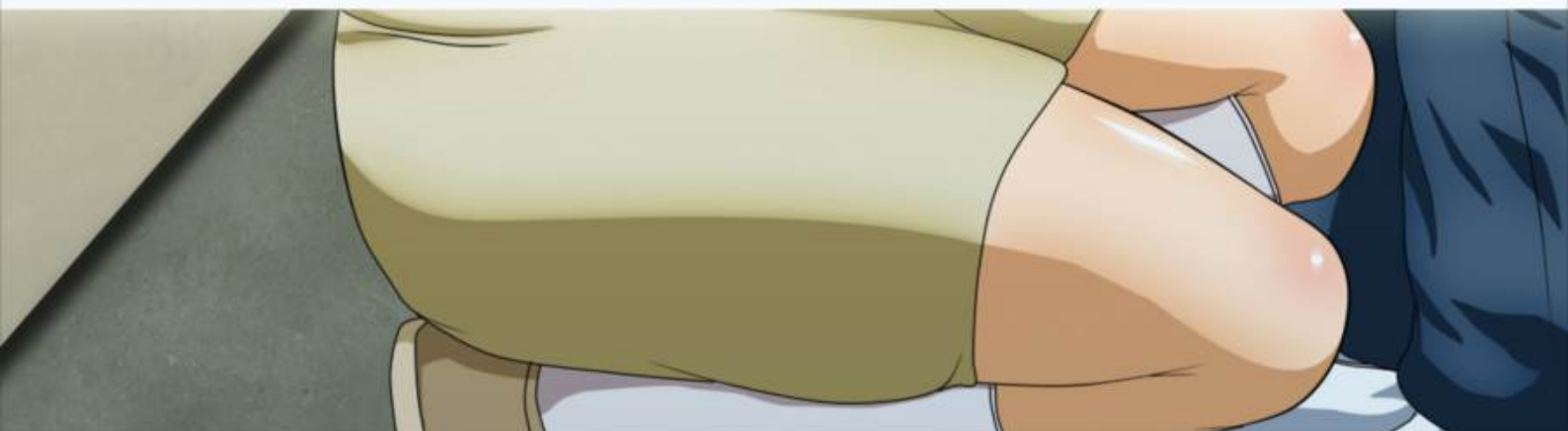
でも忘れてならないのはここが公共のトイレ内ということだ。  
今は無人だと思うけど、いつ誰が入ってくるかわからない。  
気のせいかな…音とかがすごく大きく聞こえてしまう…



あああ…なずなが…口の中で僕の包茎の包皮の内側に舌を差し込んでくる…  
皮と亀頭の間の円周を舌がクルクル這いずりまわる。



普段表へ出ない敏感部位を重点的に責められて思わず腰が引ける。  
色々試すかのように口の中で皮を剥いたり戻したり…



なずなの口の中はすごい…初めて膣内に入れた時もすごい気持よかったけど、これはまた別の衝撃だ…数分と経たず射精感がこみ上げる…

「なずな…もう…」

アポ

アポ

「ん…♡いいよお兄ちゃん…このまま口に出ひて…なずなが…ん…全部飲んであげるから♡いっぱい口の中でお漏らしひて…♡」

ああ…出る…イク…妹の口の中に…



口内射精

ド  
ピ  
ニ  
ツ

ん  
ん

ド  
ピ  
ニ  
ツ

大量の精子を妹の口内へと次々と送り込んでいく。





なずなが今度は口内に出された精子を飲み込んでいく。  
ゴクゴクと喉が鳴る音がここまで聞こえる……

「ん……ん……ん……」

ゴク  
ゴク

そして精子を全て飲み干し、周りについた精子も綺麗に舐めとって  
やっと口を離してこう言った。

「お兄ちゃんお願い……今度はなずなを気持よくして……♡」



なぜか避妊具を携帯しているなすな…流れるようにゴムを付けられる。

まさかこんな駅のトイレで  
することになるとは思わなかった。  
なんちゅう大胆な○学生だ…。

「なすな…入れるぞ…」

「うん…お兄ちゃん♥来てえ♥」

アッ





「あんっ♡んっ♡ああっ♡」

「なずな…声が大きい…」

「だつてえ…♡」

「声我慢しろ…外まで聞こえるぞ」

中に人は居なくてもトイレの外まで聞こえたら意味が無い…

やい

やい

パン

パン

パン

パン

パン

パン

口に手を当てて  
必死に声を我慢するなずな…

「ん…♡んん♡…ふ…♡♡」

声を我慢して漏れ聞こえる  
なずなの喘ぎが逆に艶めかしい…  
それに反して僕の腰は早まっていく…



そしてついに限界が近づく

「なずな…そろそろイク…ぞ…

声…出すなよ…」

「ふぐ…ん…ん…ん…ん…ん…ん…ん…」

相当声を我慢するのが辛いらしく…  
「もう限界」という表情を  
送っている…

「なずな…イクっ！」



# 射精

なすなの体が大きく  
ビクンビクンと痙攣する。  
同時に絶頂に達したらしい。

「~~~~~」  
「~~~~~」  
「♡」  
「♡」

ビクン

ビクン

ブルブル

ガク  
ガク

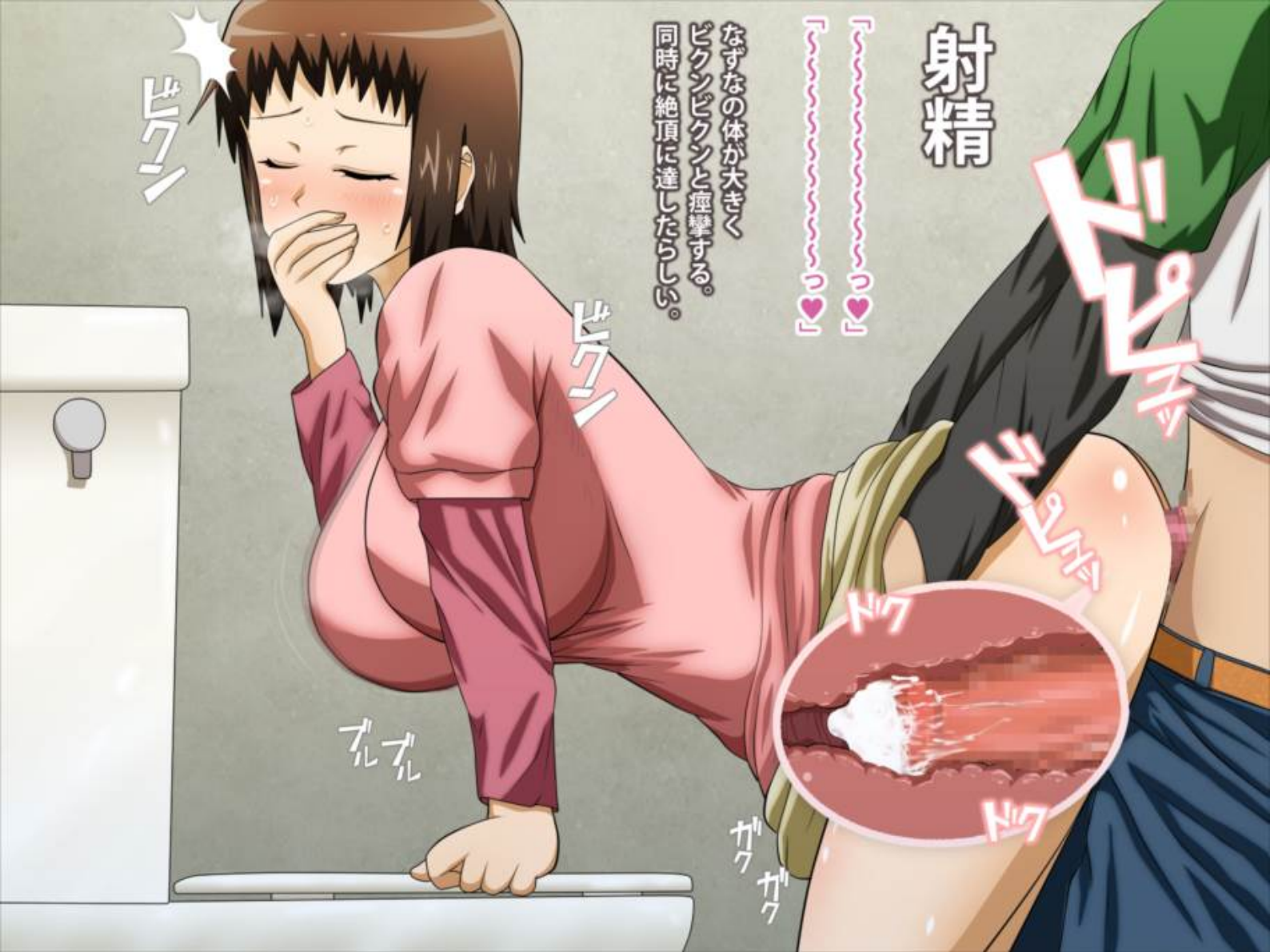


ド  
ピ  
ツ

ド  
ピ  
ツ

ド  
ピ  
ツ

ド  
ピ  
ツ



「はあ…はひ…あ…あ…あ…♡」

絶頂の余韻がなかなか  
治まらないらしく…  
しばらく力なく肩で息をしていた。

「お兄ちゃん…ごめんはない…  
…わたひ…イクのが止まんない…の♡」

…まあ…ともかく誰かに  
見つからなくてよかった…



○月×日…なすなに「良いこととしてあげるから壁に手をつけておしりを突き出して」と言われた。…なんかむしろ嫌な予感が…

「な…なすな…なにをする気…」

ワタシ

「お兄ちゃんじつとじでね…♡」

「なす…ああっ！」

なすなが僕のおしりにキスをする…  
そして探るように舌が這いずりまわる…  
まさか…

キス

キュ



「ああああ…あああつなすなつそは！」

なすなの舌が僕のおしりの中に侵入してくる

「お兄ひゃんちよつろ声大きいよ…お姉ひゃん達に聞こえひゃうよ…」

「でもなすなそん…な所キタナイし…」

「お兄ひゃんの体に汚い所なんて無いよ♡」

……なんつー迷いの無い返答だ…



あああ…○学生の妹におしりの中を舐められてる…

にゅるる♡



くちゅ♡

そのまま同時に手コキも開始される。

「お兄ちゃん…気持ちいい♡」

気持ちいい…んだけど、  
それ以上に…なんかすごい恥ずかしいんですけど…



くちゅ  
にゅる

プルプル

シユッ

シユッ

プルプル

なずなの舌は、僕の直腸内の隅々まで這いずり回る。  
そして手の動きも加速する。  
ほぼ強制的に射精感が二気にこみ上げられる。

「なずな…もう…出ちゃう…」

「いいよ…お兄ちゃん♥…なずなの  
おひり舐め舐めでいっぱいイッて♥」



プルプル

ちゅ ぐゅ  
にゅるる

シコ

シコ

シコ

プルプル

「イクっ!」

「お兄ちゃん♡いっぱい出てる♡」

妹におしりの中を舐めまわされてイッてしまった…  
イッた後もなすはしばらく舐めるのを止めなかった。



そして例によってゴムをつけ(最近慣れてきた)、なずなの下着を脱がす。



「なずな…入れていいか?」

「うん♥…なずなの体は  
お兄ちゃんだけのモノだよ♥」

「なずなっ!」

妹の○学生としては大きすぎる体を持ち上げる。

ピク

ピクン

「ああ…お兄ちゃんのがなすなのの中に入ってくるよお♡」

あ

なすなの膣内に挿入する。  
すごく濡れていて熱い…

「なすな…動くぞ…」

「うん…お願いお兄ちゃん…  
なすなをいっぱい犯して♡」

ええ

そして未だに淫々しい腰つきで  
ピストンを開始する。





「あん♥ああ…ん…はっ♥ああ♥」

「お兄ちゃん♥あん…なずな…」

「の…中…気持ちいい?♥」

「うん…なずなは?」

「うん…すっごく気持ちいいよお♥」

パン

パン

パン

パン♥

パン♥

そして限界が近づくと…いつもでいいだけ我慢しようとするのだけど…  
なすなの膣内は気持ち良すぎる…

「そろそろイク…ぞ…なすな…」

「いいよ…お兄ちゃん♥  
なすなでいっぱい気持ちよくなってる♥」

射精へ向けて最後に  
一気にスピードを加速させる…  
もう限界だ…イク…





「なすなつー出るっ」

「~~~~~」

「ほふ…お兄ちゃん…の♡が♡  
すぞい…いっばい出るよお♡」

最初は戸惑うばかりだったけど…  
最近自分からもなすなを求めている…  
なすなとしない日が続くと悶々とする…



ジュワッ

グワッ

ジュワッ

プル  
プル

プル  
プル

○月×日…めずらしく風邪をこじらせてしまった。  
バイトも休んで、学校も2日程休んで3日目…  
なすなが熱心に看病してくれたおかげもあって、  
熱も下がってきた。そんな朝だった。



夢つつつの中…なにか下半身が寒い…それに違和感がある…  
まさか風邪がぶり返したのか?と思いつつ…  
若干朦朧とする意識のなか…そっと眠けまなこをこじ開ける…  
するとそこには意外な光景が広がっていた…

「なすなっ!？」

「あ、お兄ひゃんおふあよあ♡」

「な…ななな…何して…」

「え?お兄ちゃん…お風呂2日程  
入らなかつたでしょ?…だから」

「だからって…いやいやいや…  
そんな汚いし、止めなさい!」

「ううん…だからなすなが綺麗にしてあげる♡」

そう言っつて、僕の包皮を剥いて…溜まった恥垢を舐めとるなすな…  
ただでさえ皮被ってるのが少しコンプレックスなのに…  
妹に剥かれて口で掃除されるなんて…恥ずかしいにも程がる…



「ほあ……ごもいっぱい溜まってる……♡」

包皮の内側、カリの裏側、様々な所の恥垢を舌でこそげ取っていく……ホント嬉しそうに……恍惚な表情で僕の汚いペニスを隅々まで掃除して行く。

「ふっ……ペロペロされるの気持ちいいわいれしょ？♡」

とうとうか2日程まったく精子を外に出していなかったせいか……この状況で射精感が襲ってくる。

「なすな……ごめん……も……も……も……」

「いいよお兄ちゃん……溜ってたでひよ？  
なすなが全部受け止めてあげるから  
いっぱい射精して♡」

「でも……も……も……我儘出来な……出る……あああ……」



「あんっ♡」

射精…なすが思わず驚きの声を上げる。  
いや…自分でも驚く程の量を射精する。  
2日程溜め込んだ精子の行き場を失った  
射精の勢いは留まる事知らない。



「あふ…お兄ちゃん精子いっぱい出たね…  
そんなに溜ってたの？またお掃除しなきゃ♡」

そっ言って、今度は精子を舐めとる。

「ん♡…すっごいブルブルの精子…濃くておいひ♡  
朝ごはんはこれでいいかなあ…」



こうして僕の朝はやってきた…かなりの衝撃を持って。  
逆に学校でもバイトでもこの事が脳裏から離れなくなって  
悶々とした一日を過ごすことになったのは言っまでもない。

○月×日：なすなが体操着姿で僕の部屋に訪ねてきた…となるともうすでに「エッチをする」という暗黙ルールみたいなものが出来上がっていたわけだが、この日は登場の仕方が若干違った…

「お兄ちゃん♡これなーんだ？♡」

「そ…それは…なす…なの…パン…下着…」

なんとなくストリートに「パンツ」と言っのも恥ずかしかったので、あくまで「下着」と言った。それに姉達の下着と違って、なすなの下着は未だに僕が洗濯してるし…そりゃ知ってるけど…

ぴろーん♡

「うん♥正解だけど不正解♥正確に言うとな…これ脱ぎたての  
パンティなんだ♥しかもなすが今日一日履いた♥」

「ギャルのパンティおくれ」なんつーセリフがあったが…なすなのパンツは  
…いや下着だけは見た目に似合わず歳相応のデザインなんだよな…  
いやそれは置いて…妹の…○学生の使用済みの下着なんて…  
一部のマニアからすれば結構切望のひとつ品かもしれない…

「お兄ちゃんヘッドに寝て…いいからあ♥」

若干嫌な予感がしつつも、こういう時はいつもなすが先導…  
いや煽動してきたので、僕はとりあえずそれに素直に従う。





「むぐぐ!!」

むぎゅ♡

ホカ

ホカ

「ほらお兄ちゃんなすなの恥ずかしい匂い…  
いっぱい嗅いでいいよ♡」

その脱ぎたての温かい生ハンティ(?)を

例の如く鼻と口を塞ぐように押し付けられた。

以前のあまり思い出したく無いことが脳裏に蘇る。

そのまま思考の余地なく下半身の衣服を脱がされる。



「お兄ちゃんどう？私が一日履いたパンティの匂い…  
今日は体育で汗かいたり、お兄ちゃんとのエッチを妄想して  
濡れちゃったりしたから…なすなの濃い匂いがすると思っの♡  
嫌な匂いかな？それともこういう匂い好き？」

「むん…」

たしかになすなの下着の匂いはすごくエッチな匂いがした。  
なんともいえない女の子特有の匂いと言ったほうがいいだろうか。  
正直すごく興奮してしまっ匂い…と言ったほうがいいかもしれない。



たぶんなすなは僕以上に僕の事をわかった上でこういう事をしてるんだと思う。  
匂いで…嗅覚で僕を性的に支配する術を知っていると云った方がいいかもしれない。  
事実僕は…妹の一日履いた脱ぎたての下着の匂いでどうしたって興奮していた。



「ほらあお兄ちゃんのおちんちんカッチカチだよお♥  
なすながやさしく手でシヨシヨしてあげるね♥」

「私のエッチな匂いいっぱい嗅ぎながらシコシコさせられるの  
そんなにいいの？おちんちんすごい反応だよ♡」

匂いと手コキの同時責めは強烈だった。  
恥ずかしいけど…否応無しに…もうイカされそうだ…

「むぐぐ…うう…」

シコ

シコ

シコ

アッ

アッ

アッ

なすなが危険な程超ノリノリモードだった。

「あれれ♡もうイッちゃうの？無理やり嗅がされてる

なすなの脱ぎたてパンティの匂いでイッちゃうのお？♡」







「お兄ちゃんいっぱい出たねえ♡  
よっほどなすなの匂いがよかったのかなあ」

「イッた後もしばらくはなすなの匂いに包まれながら余韻に浸ってた…。  
とりあえず今回は気絶せずに済んだらしい…」

ビク

ビク

ビク

ビク

ビク

そしてそのままエッチに移行…ゴムのストックが無いという事で生で挿入…  
膣外射精すればいいやと思っただけ…

「ねえお兄ちゃん…今日は…今日は中を出してお願い♡」

「でもな…それは…」

「今日は大丈夫な日だから…ね?♡」

「もう我慢できないの…お兄ちゃんの精子…膣内に流しこんでほしい♡」

グプッ

フプッ

ヤシ  
ヤシ



うっ…腕で首を…脚で下半身をガチっとロックされ…た…  
なずなは姉さんから護身術も習ってるせいかな…いや逃げられそうもない…

「わかったなずな…今日…ただぞ?」

「うん…うん…今日だけでいいから…いっぱい膈内を出して♥」

「う…なずな…もう…イク…」

ギョッ

ガツキッ♥

フプッ

グプッ

ギシ

ギシ



「私もイク…イツちゃうよお♥思いつきりなずなの膈内にプルッブルの精子流しこんで♥」





しばらくの間絶頂が続いた後…少し治まってきたみたい。

「なずな…気持ちよかったか？」

「うん…すつごく気持ちよかった…♡ありがとう…お兄ちゃん…  
なずなの我儘聞いてくれて…大好きだよお兄ちゃん…♡」

ギョッ



こんなに感じてくれて…嬉しそうになずなを見ると僕も嬉しくなる…

フムフム

フムフム

最近…安全な日は生でする事も多くなった…良くないことはわかっているのだが…  
僕もなずなを満足させてあげたいし…気持よくさせてあげたい。

「お兄ちゃんキス…キスう…♡」

「ん…」



最近はずなはキスもすごく巧い…  
最初はあえてチュッチュとお子様キスで…焦らせてきて…  
そして…だんだん強く唇を重ねてくる。

「ん…ん…♡」

そして…若干油断していると…にすかさず…



一気に舌を侵入させてくる…その舌で僕の舌を為す術もない程に「犯す」  
なずなの甘い唾液や息遣いも僕の脳を圧倒的に刺激してくる。  
舌技だけで、あたかも妖艶なフェラチオを想起させる。

その内…なずなのキスだけでイカされるのではないかと…怖くなる程に…



初めて…なずなとこういう事をし始めた頃は戸惑ってばかりだったけど…  
なずなが心から僕を想ってくれてるのがわかって…  
今は…妹が…なずなが…とても愛おしい事に気がついた。

「ん…お兄ひゃん…ひゅきい…ちゅ…ん…♡」

「なずな…膣内で…出すぞ…いいな？」

「うん…お兄ちゃんの精子…なずなにたくさん頂戴♡」



アプ

グプ

ギンギン

パ

「イク！」

「んんっ♡」

「♡~~~~~」



「ド  
ピ  
」

「ズ  
ク  
」

「ギ  
シ  
」



「お兄ちゃんいっぱい膣内に出てるよ…あつたかい…♡」

僕は射精が終わるまでピッタリと体を密着して最後の一滴までなずなの膣内に注ぎ込む…

「なずな…もう一回…いいか？」

「うんいいよ…お兄ちゃんの…膣内でまた大きくなってきてる…♡」



ビク

ビク

ガシ





服も脱いでなすなにまた挿入する...

「お兄ちゃん...来てえ...♡」

「なすな...」

正面からなすなの  
膣の奥まで到達する  
なすなの表情がほころぶ...

「お兄ちゃん...もう一回なすなに  
精子いっぱいください♡」

ドキ

ドキ

♡♡

ドキ

ドキ

アッ

「な…なすなつ！」

「ああん♥」

僕の劣情をぶつけるかのようだ  
激しく腰を打ち付ける…

「なすなつ！なすなつ！なすなつ！なすなあ！」

「あん♥あん♥お兄…ちゃん…」

「あつ…あんつ…お兄ちゃん♥」

「お兄ひゃん♥お兄ひゃん♥」





「う…なすな…膣内で…膣内ですぞ！」

「あっ♡あっ♡お兄ひゃん…膣内れ…膣内れ…  
いっばい出ひれ…いいからあ♡」

「なすなっ！イクっ！」

「お兄ひゃんっ！♡ああっ♡」

シホ

ニヤ

フホ

パ

パ

パ

パ

パ



「いきゅううううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
イクっ♡イクっ♡

ドクン

ビュルルッ

ドクン

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「……お兄ちゃん……たくさん……出たね♥」

「……なずな……」

「……?」

「……なずな……好きだよ……」

「……やっと……やっとお兄ちゃんに好きって……  
好きって言ってもらえた♥嬉しい……私も……私も……  
お兄ちゃんの事……世界で一番大好き……だよ♥」

「この後なずなに思いっきり  
サバ折……抱きしめられて  
気絶しそうになったのは……秘密だ。」

ドク

ドク

ドク

フルフル

END